

両性具有のシヴァとシヴァー

—『シヴァ・プラーナ』の場合—

神 館 義 朗

は し が き

表記の「両性具有」という問題は宗教学に於ても独自の関心を集めており、たとえば、小口偉一・堀一郎監修『宗教学辞典』は特に独立の一項を設けて論じている。⁽¹⁾ところで、インド教シヴァ派の聖典『シヴァ・プラーナ』の中にも、この觀念が明瞭な形で存在し、主神シヴァとその配偶神が共に両性具有とされている。⁽²⁾そこで本稿に於ては、同書から「両性具有」に関する記述を拾集し、これに若干の考察を加えて、『シヴァ・プラーナ』の両性具有像が持つ特色を尋ねることしたい。

なお、『シヴァ・プラーナ』の読解に使用した梵文原典と英訳書は左の通りである。⁽³⁾

〔梵文原典〕 *The Śiva Mahapurāṇa*, with an introduction by Dr. Pushpendra Kumar (Purana Text Series 1), Delhi : Nag Publishers, 1981.

〔英訳書〕 *The Śivapurāṇa* (Ancient Indian Tradition & Mythology Series, vols. 1-4), 4 vols, Delhi : Motilal Banarsidass, 1970.

第一節 資 料 篇

本節に於ては、原典の關係箇所を和訳引用または要約によつて提示し、必要に応じて補足的説明を添えることにする。その際、提示の順序は原則としてテキストの進行に従い、各々の冠頭には通し番号を置く。この番号は以下の論述で用いる資料番号に相当する。

一 「そこでまた、創造を目的として苦行^{タパス}を行っていると、三位を支配する偉大な神は、アヴィムクタという名の自分の場所から眉間と鼻の真中を通じて（発出し）、半女性神⁽⁴⁾となつて（ardhanarīśvaro bhūtvā）特に私の前に立ち現れた。慈愛の海であり各部が完備した

全主宰神として。

私は、この、かつて何らかも生じたことがなく、光輝の集束、ウマーの夫、一切知、一切の造出者であり、ニーラローヒタとして知られるシャンカラを見て喜び、大信仰心を以て礼拝讃嘆し、神々の支配者(である彼)に対して『汝、多種多様の生類を創造し給え。』と言った。」

(二・一・一五・五五―五八)

右の文中、「私」とは梵天である。彼は、自分の息子達が創造の仕事を引き継がずに遁世の道を選んだので怒り且つ困惑し、ヴィシヌの指示に従い、シヴァの助けを得るために苦行を行う。するとシヴァが半女性神の姿を取って現れた、というのである。

なお、この「半女性神」(ardhanarīvara)がインド神話に於て「両性具有神」を指示する最も代表的な言葉であることは、周知の通りである。

二 「パールヴァティーは」どのようにして、スマラ神の壊滅者(即ちシヴァ)の半身を占めるもの(ardha-sarīra-svā)となったのですか。」

(二・二・二・六)

この文は、シヴァの妃神が両性具有であることを示唆しており、その点で注目すべきである。

(資料三―五、七、一三参照)

三 「すべての罪なき者に果報を与え、三界の母にして善美であり、シャンカラの半身を分有する(saṅkarārdhāṅga-bhāginī)のサティーをこそ、常に満悦させるべきである。」(二・二・三・七)

四 「そこでサティーは、さらに苦行^{タパス}を行じてシヴァを夫に選んだ。

そしてシヴァーは、色白く、(夫)の左半分を占めるもの(ardha-vamāṅgi)となり、玄妙な多くの遊技を行った。」

(二・二・四三・四〇)

五 「(ヒマラヤ)山よ。ハラは汝の娘と合して半女性神(ardhanarīvara)となるであろう。かくて歓喜の二つの日が合したるが如くなるであろう。汝のその娘も、苦行の力により全宇の支配者である偉大な主宰神を満悦させ、ハラの半身を自分のものとすべし(ardhanarīvara harasyaisāharīyati)。」

(二・三・八・二九―三〇)

ここは、ナラダ仙がヒマラヤ山に説示している場面、「汝の娘」とはパールヴァティーのことである。それ故、右の文は、シヴァとパールヴァティーが互いに相手の半身を分有し合っていること、即ちシヴァとシヴァーが共に両性具有であることを明示している。ただ、共に両性具有であるシヴァとシヴァーが別箇の独立した二神として存在するのか、それとも両者が合体した一者が存在するのか、という点は判然としていない。この問題については、第三節で触れる。

六 本書二・五・四九・一七に「半女性神」(ardhanarīvara)という言葉がある。これは、アスラのアンダハカ(Andhaka)が観じたシヴァの一〇八相の一つとして出てくるものである。

七 「さて彼女は、自分の夫であり、大きな好奇心に駆られた、卓越

せる主人シャンカラの目の合図を悟った。そこで、全知者の半身をもつ彼女 (sarvajñāṇḍa-sarīnī) は、その合図を了別し、かの二人を毬で同時に打った。」 (二・五・五九・二三―二四)

ここで「全知者」とはシヴァであり、「彼女」とはパールヴァティーである。従って、この文は、シヴァーがシヴァを半身に持つ両性具有の女神であることを物語っている。次に、この前後の話を簡単に述べておこう。

ある時、パールヴァティーがシヴァと毬遊びに興じていると、彼女を連れ去ろうとして二匹の悪鬼^{ダイト}が空中から降りてくる。それと知ったシヴァは彼女に目で合図を送り、彼等が家来ではなくて悪鬼であることを知らせる。その合図の意味を了解した彼女は、毬を放って彼等二匹を同時に打ち落す。すると、その毬はリングに交じ、毬自在神 (kandukeśvara) として知られるようになった。

八 本書の第三集『百ドル本集』の第三章は「半陰陽としてシヴァの降現」(śivasyārdhanārī-narāvatāra-varāna) という題名で、この章の中に「半陰陽」という言葉が三度ほど現れる。⁶⁾そして何れもシヴァ神を指している。そこで、本章の梗概を次に示そう。

シヴァから創造の仕事を委ねられた梵天は生類 (brāh) を造出する。ところが、造出された生類には女性がいなかったため、彼等は自分達だけで子孫を産み出すことができなかった。それで生類が思うように増殖しないことに悩んだ梵天は、最高のシャクティであるシヴァーと結合したシヴァ神を念じつゝ、大いなる苦行^{タパス}を行ずる。このタパスに満足し梵天の悩みを知ったシヴァは、半陰陽の姿を梵

天の前に現わし、自分の身体の一部から女神シヴァーを分離する (pṛthak cakāra vapuṣo bhagad devīm śivām śivāḥ)。分出されたシヴァーを見て梵天は、彼女に礼拝し、およそ次のように懇願する。《私は神々達を意志^{タマス}だけで造出しましたが、彼等は自分達だけでは増殖しません。これからは男女の結合による造出を行つて (mihuna-prabhavam eva kṛtvā sṛjīm) 全ての生類を増殖させたいのです。ところが、貴女はこれまで女性族を造出しませんでしたから、私には女性族もシャクティもありません。シャクティは貴女からのみ生ずるのです。どうか女性族を生み出すために私にシャクティを与えてください。そのために、私の息子ダクシャ (Daśa) の娘として生れてください》と。これを聞いたシヴァー即ちシャクティは、その眉間から自分と同じ光明をもつ、もう一人のシャクティを發出する。そして、このシャクティがシヴァの勧めによりダクシャの娘となるのである。こうして梵天に無比の威力^{シャクティ}を与えたシヴァーは、またシヴァの身体に入ってしまう。

この話は、女性の起源および男女両性による生類増殖の由来を説明する神話である。そして結局、それらの究極の根源をシヴァの両性具有に帰し、シヴァ神の全一性を強調しているのである。⁷⁾なお、これと同類の物語は資料一四にも存し、また梵天による創造の場面で両性具有のシヴァが出てくるところは前記の資料一とも共通している。

九 「左の部分が (ヒマラヤ) 山の娘である汝に帰命する。 (namas te'stu vamaṅga-giriṇyā) (三・四一・三六)

この「汝」は勿論シヴァである。また「左の部分が山の娘である」

という表現が「パールヴァティーを左半身とするもの」の意味であることは、改めて言う迄もない。

一〇 「その、半身が(ヒマラヤ)山の娘の姿をしている光輝に、常に帰命する。」 (四・一・一)

この「光輝」はシヴァ神を指す。右の原文は左の如くである。

tasmai śaila-sutāñjīrādhā-vapuse śaśvan namas tejaśe

一一 「心を集中して、オーム字を、太陽の円輪中にあつて一切の光明から成り、不可思議な徳グテを具え、一切の装飾で飾られ、八臂、四面で、半分は女性から成る(ardha-nārī-maya)」、玄妙で最高の自在神であると念じつつ……。」 (六・四・二九—三二)

ここでは、両性具有の自在神が「四面」とされており、一見したところ梵天ブラフマーを指しているかのようにある。しかし、この場合はシヴァ神を指すものと見るべきである。理由は次の四つである。(一)、この第四章で思念の対象とされているのはシヴァ神のみであり、他の神への言及はない。⁽⁹⁾シヴァも梵天も共に五面とされている場合があるから、あまり面の数に拘泥する必要はない。(二)、現にシヴァを四面とする例が資料一二と一七に見られるし、シヴァの千名の中にも「四面」(catur-mukha)が出てくる(四・三五・一〇九)。四、右の文では四面の最高神と聖音オームが等置されているが、一・一〇・一七や一・一〇・三二等に於て、シヴァは聖音オームのことを「本質的に私と同じもの」(mad-ātmanakā)と述べ、シヴァ自身とオームとの等同関係を強調している。⁽¹⁰⁾

一二 第六集・第六章の「布置」(vyāsa)を説く義軌の中に、《マンドラ中の太陽の心蓮上にある掌中の花の中にシャクティを発現せしめ、呪文を唱えるように》という趣旨の一節があり、その太陽が、左半分は女性(yānārḍha-dayitā)で、四面・十二眼なるものとして描かれている。 (六・六・二—二四)

ところで、第五章の終りから本章にかけては、太陽とシヴァ神が殆ど区別されずに礼拝の対象とされ、両者は全く同一視されている。それ故、右に言う太陽もシヴァのことであると考えてよい。英訳者の理解も全く同様である。⁽¹¹⁾

一三 「この明らかにシャンカラの半身をもつ女神(yānā bhagavati śākṣāc chamkārādhā-sarīni)」、即ち、五面、十臂で、十五眼を輝かせ、九宝の冠から立ち昇る三日月に飾られ、透明な水晶のように清く、慈愛なる武器を携え、その各肢体に首飾り・腕釧・縷絡・鈴・踝環等を装い、神々しい衣服を着て、宝石の飾りを付けた、すべてのアートマンに遍在するシヴァーは、サダー・シヴァなる神の美しい正妻であり、世界の母(yagad-ambā)、三者の産出者であつて、三徳グテにして然も無徳、かつて何からも生じたことがなく、ヴィシシュヌや梵天や神・聖仙・乾達婆の首長達および人間によつて常に奉仕されるべきである。」 (六・一三・五二—五六)

ここでもシヴァーが両性具有とされているが、今は彼女を「世界の母」と呼んでいる点に注目したい。何故なら、この言葉は彼女の呼称として繰返し現れ、⁽¹²⁾シヴァの妃ⅡシャクティⅡ世界の根源的物質原理(prakṛti)と云う一連の等置関係を背後にもつもので、このよう

な「世界の根源」としての彼女が両性具有、つまりシヴァ神と合体しているということは、畢竟、超越的絶対者シヴァと現象世界との微妙な関係を象徴的に示しているからである。

一四 第七集・前篇の一五―一六章に、前述の資料八で紹介したものと同じ内容の説話があり、一五章・第九句に「半女性神」(ardhanārīṣvara)という言葉が出てくる。また、その直前の第五―六句では「太古の最高のシャクティ」について述べ、これを「常に主宰神の脇にあるもの」(nityam īśvara-pāśva-ga)と形容している。そこで、この形容に少し留意したい。と言うのは、この表現は必ずしも「両性具有」を表すものではないが、そこに現実の仲睦じい理想的夫婦像が投影されているように感じられるからである。そして、その直後に現れる、シヴァとシヴァーが緊密に一体化した ardhanaṛīṣvara の姿は、このような現実の理想的夫婦像の延長線上にあるものと考えられるのである。

一五 本書七・一五・三三に、讀詞の名前として「半女性神」(ardhanārīṣvara) が出てくる。

一六 「十二(葉)の中なる月の彼方、白蓮に座す偉大な神シャンカラ、即ち信者を慈しみ、無垢で、姿やさしく、透明な水晶のように清澄な、涼やかに輝く半女性性の神 (ardhanārīṣvara) を……。」

(七・一・三三・五〇―五一)

この章はシヴァ派の最高の法へ最上随行 (śreṣṭhānusīdhana) を教

示するもので、その観法の中でシヴァを両性具有として念ずるように説いているのである。

一七 「そこで最勝神ハラは、笑みを湛えて女神を見やり、自らの相を、(即ち)げに恐ろしく、太陽を本性とし、一切の権威と美德を具え、一切の光輝から成り、シャクティや変現像やアンガや遊星や神々に取り巻かれ、八臂、四面で、その半分は女性である (ardha-nārīka)、玄妙にして最高の自相を、開示した。ヴィシュヌを始めとする神々は、このようにして、神は太陽で女神は月であり、他の五原質 (pañca-bhūtaṁ) 及び動・不動の(一切)はそれより成るものである、と知って……。」 (七・二・八・二七―三〇)

ここでまた我々は、「四面」の半女性神に出会った。しかし、この半女性神がシヴァであることは、文脈上、紛う方なく明らかである。そして、この一節には、多様な世界の中にあつて全一なるものを求め、これを両性具有のシヴァに見出したインド的思维的飛跡を見ることができであろう。

一八 「まず神に対して沐浴等の所作を行い、その後に女神に対して行うべきである。神々の神なるものの教えであるから。礼拝の対象が半女性神 (ardhanārīṣvara) の場合には前後の順序はない。どこであれ、リングへの奉仕や他の何らかの場合にも。」

(七・二・二四・五〇―五一)

これはシヴァに対する礼拝供養 (pūjana) を説く中に出てくる。従つて、この半女性神もシヴァを念頭に置いて語られたものであろう。

一九 「このように実行する時、(それは)シヴァの火となるであろう。そこにシヴァの座がある、と思念せよ。そこに半女性神(ardhanarīśvara)のシヴァを勧請して祭儀を行え。最後に燈明を撒き、薪柴のホームを実行せよ。」 (七・二・二七・二七)

右の文は「火の所作」(agni-kārya)の説明の中に出てくる。即ち、資料一六や一八の場合と同様、実践的行法の中に両性具有神が現れるのである。このように「行」の面にも両性のシヴァが姿を現すということは、この觀念の本書に於ける重要さを示すものと言える。

さて、以上の資料一―一九に於ては、「両性具有」の觀念は「半身が異性なるもの」という趣旨の言葉で表されていた。そして本書にあっては、そのような言葉が「両性具有」を表す代表的なもので、出現回数も目立って多い。しかし、その外の表現もないわけではない。それを次に示そう。

二〇 「シヴァはヨーニとリングの自相によつて出生を定める。」⁽¹⁶⁾

(一・一六・八六)

二一 「それは独存の愉悅に耽つていたが、第二のものを欲するようになった。まさにそのものが、特性を帯びたものとなり、シヴァと名付けられる。まさにその彼が、男・女の相の区別により(puṃ-śrī-rūpa-bheda-tas)二様となった。実に、その男性がシヴァと言われ、女性がシャクティと呼ばれる。」(四・二二・三―四)冒頭の「それ」とは、純粹精神(cit)と歡喜(ananda)を本質とす

る、(厳密に言えば言葉で規定できない)永遠不変の實在のことである(四・二二・二参照)。それは、自らを神として現実世界の中に具象化する時、シヴァという名称をもち、同時に(善き)特性を帯びたものとなる。その神が更に男・女の二様になった、というのである。この資料は、後に第三節・第三項で取り上げることになる。

二二 「ただ独りであつた(主宰神)は、自分の意志で体を裂き、(然も)我が身を損傷することなく己れの身体からシャクティを創出した。」 (二・一・六・一九)

この文だけを見る時、そこに明瞭な「両性具有」の觀念が存するか否か、少々疑問である。それで、以上の諸資料の最後に置いたのである。

シヴァまたはシヴァーを両性具有とする箇所は、ほぼ以上の如くである⁽¹⁷⁾。ところで本書には、梵天の両性具有についての記述も散見する。序に、それらも見ておくことにしよう。

二三 「そこでまた私は、実に(私の中に)内在するシヴァに衝き動かされて自分の身体を二分し、そして二つの相をもつもの(dvī-rūpa)となった。牟尼よ。何時も半分は女(nārī)で、半分は男(puruṣa)として。牟尼よ。」 (二・一・一六・一〇―一一)

右の「私」とは梵天である。それ故、この箇所は梵天を両性具有とする例の一つである。但し、ここで注意すべきは、梵天の両性具有を現成せしめた根源的存在として、内在するシヴァがあつたことを明示

している点である。

二四 「創出された生類が増殖しなかったので、その時、自分の身体を二分して、まさしく男と女になった。」¹⁰⁸ (五・二九・二四)

この第二章の主題が「梵天による創造」であるところから見て、主語は恐らく梵天であろう。すると、この記述は前出の資料八と一四で見た「梵天による生類創造」の挿話を背景としていることになる。従って、この場合にも、梵天の両性具有はシヴァを根拠としているわけである。

二五 資料八と一四の項で見たように、第七集・前篇の一五―一六章は、梵天が、両性具有の姿で現れたシヴァからシャクティを与えられる話を主題としている。そして、続く一七章の始めにその後日譚が出てくる。その要旨は次の如くである。

シヴァからシャクティを与えられた梵天は、その結果、自分もまた半身は男で他の半身は女となり、まず一对の男女を生んだ。その男子がヴィラージュ (Vīra) 即ちスヴァーヤンブフヴァ・マヌ (Svāyambhuvah Manu) であり、女子がシャタルーパー (Satarupa) である。そして、この両者が夫婦となつて二男二女を得た。¹⁰⁹ こうして梵天は、男女両性の結合による生類の増殖を果すことができた。
(七・一・一七・一一六)

ここでも前の二例と同様に、梵天を両性具有としている。然も、梵天の両性具有がシヴァの両性具有に依存するものであることを、一層はつきりと述べている。だから、本書に於ける梵天の両性具有像は、

とても第一義的意味をもち得ないのである。

このほか本書には、一見「両性具有」のことを述べているようで、実は必しもそうとは言えない箇所がある。それを最後に挙げよう。

二六 「私は、ある時は女性の相であり、ある時は男性の形であり、ある時は両方の相である。^{アーカイラ} (即ち) 一切を相とする女神なのである。」
(五・四九・三〇)

この「私」は、シヴァの妃ウマーである。従って、この箇所はシヴァを両性具有とする一例のように見える。しかし、ここでウマーは変現自在な自己の力を誇示しているのであり、特に自分が男女両性の合体であることを言おうとしているわけではないだろう。何れにせよ、本旨が曖昧な文である。

二七 五・三六・二―二二に、マヌの後裔スディユムナ (Sudyumna) は女性と男性を特相とするもの (stri-puṃsor lakṣaṇah) であった、という記事がある。しかし、彼は本来、マヌの苦行^{タパス}によってミトラとヴァルナの^{一部}から生れたイラー (Ilā) という女性で、息子ブルーラヴァスを産んだ後、シヴァの恩寵によって男性のスディユムナとなったのである (三―一六偈参照)。それ故、この話は、「両性具有」というより寧ろ「変成男子」の一例と見るべきであろう。

第二節 両性具有の管見

『シヴァ・プラーナ』に於ける両性具有像について考える前に、ここで〈両性具有〉一般の概観を試みておきたい。

抑々〈両性具有〉を意味する代表的なヨーロッパ諸語、たとえば、英語の *androgynous* やドイツ語の *Androgynie* などは、古代ギリシャ語の *androgynos* に由来する。そして、この語はまた、〈男〉を意味する *aner* と〈女〉を意味する *gynē* との合成語である。ところで、この *androgynos* という言葉を聞く時、先ず我々の脳裏に浮ぶのは、プラトンの『饗宴』の中でアリストプロハネスが語る話であろう。そこに次のような趣意の所論があるからである。

原始時代の人間には、男性と女性のほか、男女両性が一体となった第三の性をもつ者があつた。そして人間は、すべて現在の人間二人が背中合せに一つとなった形で球体をなしており、手足は夫々四本、耳も四つ、顔は二つという具合であつた。ところが、この人間達が強力となり神に挑戦するに至つたので、ゼウスは怒つて、人間の力を弱めるために彼等の身体を両断した。こうして二分された人間達は、以後、互いに他の半身を求め合うようになった。彼等の中もと男性であつた者は欠けた半分に男性を求め、女性だつた者は女性を求め合うが、第三の両性者の場合、分かれた一对の男女は互いに異性に憧れ、異性を愛し求めるようになったのである。⁽⁹⁰⁾

右の話に出てくる第三の性をもつ者が即ちアンドロギュノス (*androgynos*) である。ところで、このような両性具有像の特徴としては、当面、次の二点が指摘されるであろう。その二点とは、(一)、〈両性

具有〉が人間のレヴェルで扱われていること、(二)、この像を人間の異性間に於ける求愛の完成という点に位置づけ得ること、である。

ところで、*androgynos* と同様に〈両性具有〉を意味し、等しくヨーロッパ諸語の源となつた言葉に *hermaphroditos* がある。この語も *Hermēs* と *Aphrodite* との合成語であるが、*androgynos* と違って元来は国有名詞であり、男神ヘルメースと女神アフロディテーとの間に生れた男の子を指したのである。この子供が両性具有とされるに至つた経緯は審らかでないが、西暦紀元前後のローマの詩人オヴィディウス (*Ovidius*) は、その『変身物語』(第四巻)の中で〈水の精サルマキスは、泉に入つた一五歳の少年ヘルマプロディトウスを見て恋慕し、逃げようとする彼に抱きつきながら永遠に彼を自分から引き離さないようにと神々に願う。あわれに思つた神々は彼女の願いを聞きとどける。その結果、サルマキスとヘルマプロディトウスは合して一つになり、男女どちらでもなく、どちらでもある、というふうになつた〉という話を伝えている。それはともかく、ヘルマプロディトスは神話に登場する神的存在であるが、彼が低位の神で極めて人間的に扱われていることは否定できない。⁽⁹¹⁾ であるから、人間のレヴェルに於ける愛の完成の具現像という意味で、このヘルマプロディトスと『饗宴』のアンドロギュノスとは同類であり、両者を同じ範疇に入れることができる。そこで、この種の両性具有像を暫くヘルマプロディトス型と呼ぶことにする。

ところが、他方に、これと異なる両性具有像が存し、その典型的な例を『ヘルメス文書』の中に見出すことができる。即ち、その第一集、通称『ポイマンドレース』(*Poimandres*) の二一九は、神であり絶対

の叡知でもあるポイマンドレースを男女両性(arenotheris)であるとし、これについて『アスクレピウス』(Asclepius) 110で「それで

彼(神)は、全一なるものとして、両性の豊饒の故に(utraque sexus fecunditate)この上なく充実しており、常に自らの意志で身籠もりつつ、産まんと欲するものを常に産み出している。」と述べている。言う迄もないが、ここで神を両性具有としたのは、両性による生殖という事実⁹²⁾に依拠しながら、然も同時に、創造に関わる一切を全にして一なる神の中に見ているからである。また『ポイマンドレース』五—八には、《光なる神から出た神の子ロゴスが、神の意志に由来する原質に乘ることによって(傍点筆者)、原質から火、空気、水、地の四元素が發出した》という趣旨の所説がある。このロゴスが男性原理として、フュシスが女性原理として扱えられていることは、明白である⁹³⁾。だから、絶対神を両性具有と見たてた思弁には《精神と自然の全統一⁹⁴⁾体としての創造神》という觀念が溶け込んでいる、と考えなければならぬ。このように、『ヘルメス文書』に於ける《両性具有》は、万物を創造する神の秘義に関わっており、宇宙論的レヴェルで扱えらるべき一種の神学的概念である。従って、人間界で見られる男女間の究極的な愛の具現像といった趣は、ここでは全く消えている。その意味で、『ヘルメス文書』の両性具有像は、先に述べたヘルマプロデイトス型の両性具有像と対照的である。そこで、このような、宇宙論的レヴェルに於ける神学的觀念を表す両性具有像を、暫くポイマンドレース型と呼びたいと思う⁹⁵⁾。

第三節 考 察

既に第一節「資料篇」に於て見たように、『シヴァ・プラーナ』に現れる中心的な両性具有者はシヴァとシヴァーであり、時たま両性具有の姿を見せる梵天は彼等の影の如き存在でしかない。それ故、本節では、シヴァとシヴァーの両者について、その《両性具有》がもつ特色を考察することになる。以下、本節を四項に分けて考察を進めようと思う。

一 先ず最初に注目させられるのは、本書の両性具有像が、男性と女性とが半身づつを分有し合うという姿で表されており、然も、その二つの半身が正當な夫妻の關係にある(資料一三参照)ということである。このような、夫婦が互いに相手と半身を分け合う姿は、まさしく夫婦愛の極致を現すもので、そのことは資料一四の項でも述べた。その外、本書では全篇にわたって両神の緊密な愛の情景が描かれている⁹⁶⁾。そのために我々は、《半女性性神》⁹⁷⁾が両神の愛の具現であること⁹⁸⁾を、何の躊躇もなく素直に受け入れることができる。また、インドにはシヴァとパールヴァティーのミトウナ像が数多く存するが、これは二神の愛の交歓を具体的に表現したものである。すると、《半女性性神》とは、学者の指摘にもあるように、このような両神の一体化を、より完全に且つ象徴的な表わしたものの、ということになるであろう⁹⁹⁾。あるいは、そこに人間世界に於ける究極的な愛の姿が投影されている、と言つてもよい。この意味で、本書の両性具有像は人間的レヴェルに於て扱えられており、従つて前述のヘルマプロデイトス型に適合する面をもっているのである。

なお、ここで改めて注意したいのは、右のような、理想的夫婦愛の極致としての両性具有像は、第二節で取り上げた『饗宴』、『変身物語』、『ヘルメス文書』の何れにも見あたらない、ということである。この点は、本書の両性具有像がもつ顕著な特色の一つである。

二 次に目を向けたいのは、シヴァ神が究極的には一切の表現を拒否する超越的絶対者であり、パールヴァティー即ちシャクティが始源的物质原理(Dakṣiṇī)を表している⁽⁹⁰⁾という点である。何故なら、このような二神が各自の半身を分有しながら合体している両性具有像は、超越的絶対者と事実世界との不即不離の関係を表示している、と考えられるからである。当然のことながらシヴァは、一切を超越する絶対者である限り、変化する現実の世界には全く関らず、自らもまた永遠不変の存在でなければならない⁽⁹¹⁾。しかし他方、現実世界が、シヴァを離れた独立の存在であるということになると、シヴァの全一性が否定されてしまう。そこで、この問題は、へ事実世界を産み出す根源を女性原理シャクティに求め、彼女をシヴァと不即不離の関係に置くこと⁽⁹²⁾によって、その解決が図られることになる。こうしてシヴァは、シャクティとの不即不離の関係により、一方では現実世界を超越した絶対者の地位を維持しながら、同時に他方では、万物を包蔵する唯一者たり得ているのである。言い換えれば、シヴァの「超越」と「内在」とが同時に成り立っているのである。次に引く一文は、この間の事情を、よく伝えてくれるであろう。

「常に彼(シヴァ)は彼女(シャクティ)と俱にあつてのみ家の主人であり、彼女は彼と俱にあつてのみ女主人である。果(kārya)としての、両者の息子が、最高の原質から生じたへ世界

(jagat)である。彼は能造者であり、彼女は(世界の質料)因である。このように(一応)両者の間に区別が立てられる。(しかし)かの唯一なるシヴァがそのまま二様に存在しているのである。ある人々は男女の関係として両者には区別がある(と言ひ)、他の人々は、最高のシャクティとはシヴァに内属しているもの(samavāyini)である(と言う)。」
(七・一・二九・三一—三三)

ここに於て、シヴァとシヴァーの合体^{アルダナリーリシニエアラ}像が超越的絶対者と事実世界との「不即不離」の関係を象徴するものであることは、もはや明白であろう。そして、このような両性具有像が宇宙論的・神学的意味を荷うものであることも、また、明らかである。

さらに、資料八と一四では、男女両性による生類増殖の起源がシヴァ神の「両性具有」を以て説明されていた。このことは、『ヘルメス文書』のポイマンドレウスを我々に想起せしめる。

こうして我々は、『シヴァ・プラナ』の両性具有像の中に、全宇宙的レヴェルで把えられたポイマンドレウス型「両性具有」の観念を、はつきりと認めることができる。

三 次に、本書の両性具有神が、第三集・第三章の章題も示すように(資料八参照)、シヴァの「降現」(avatāra)である、という点を取り上げよう。即ち、普通シヴァには男性神としてのイメージが定着しているわけであるが、時に応じて両性神の姿を示現するのである。そこには、インド的神観の特色である「権化思想」の強い滲透の跡を読み取ることができる。しかし今は、男神シヴァと、両性神として降現したシヴァとの間に存すべき「不即不離」の關係に焦点を合わせた。と言うのは、この關係が、前項で見たシヴァとシヴァーとの間の

「不即不離」の中、「不即」の方向、即ちシヴァの超越者としての面を強調することになっているからである。つまり、「両性神シヴァ」という觀念自体が既にシヴァとシャクティの不即不離を含意しているところに、更にまた「男神シヴァ」と「両性神シヴァ」の間の不即不離なる關係を持ち込むことによつて、それだけ男性原理シヴァと女性原理シャクティとの間が隔てられたのである。その結果は当然、シヴァがシャクティから独立しているという印象を強め、シヴァの超越面を意識させることになる。

ところで、右に言う「男神シヴァ」は、「両性神シヴァ」を發現させる根元として、「本源的シヴァ」を意味するわけであろう。しかし、「本源的シヴァ」とは、資料二に「まさにその彼が、男・女の相の區別により、二様となった。実に、その男性がシヴァと言われ、女性がシヤクティと呼ばれる。」と説かれているような、「男神シヴァ」と區別された「まさにその彼」のことではないならぬ。だとすると、このような「本源的シヴァ」は、厳密に言えば男性ではなく「彼」とも呼べないのであつて、「性」が發現する以前の、両性が完全に融合した、単性、否、無性^{いせ}とでも言うべき存在でなければならない。ところが實際は、この「本源的シヴァ」が「本源的」というような言葉を付して呼ばれることは殆どなく、然も、その単数主格が男性形で表されるために、「男神シヴァ」との區別は極めて曖昧である。その上、「本源的シヴァ」も「男神シヴァ」も、共に絶対者の超越性を代表する面をもっているから、我々には両者が重つて見えるのである。むしろ、シヴァという言葉には「本源的シヴァ」と「男神シヴァ」の兩觀念が渾然と溶け合っている、と言つた方がよいかも知れない。このような

わけで、先に見た、男神シヴァから両性神シヴァが發現するという場面に於て、「男神シヴァ」は「本源的シヴァ」を含意しているのである。

以上、「降現としての両性神」の意味を考え、本書の「両性具有像」が見かけほど單純なものではないことを述べた。合わせて、概念の峻別に馴染まないインド的思惟の一端に触れたのである。

四 最後に、本書が示す「両性具有」の特徴として特に重視したいのは、男神シヴァとともに、その配偶神シヴァー即ち女神も両性具有とされていることである。以下、その意味を三つの点から考えてゆこう。

(一)、シヴァの半身がシヴァーであるとすれば、これをシヴァーの側から見る時、彼女もシヴァを自分の半身として分有している、ということになる。だから、シヴァーが両性具有であることは、理の当然だとも言えるのである。ところで、このように両者が互いの半身を分有し合うのであれば、両性神同士のシヴァとシヴァーを見分けることは不可能になるであろう。この点で、二・二・一四・三〇—三三の《シヴァーに命ぜられて、梵天、ヴィシュヌ、ルドラは、それぞれ世界の創造、護持、帰滅を遂行する》という所説や、五・四五・四九の「三徳^{グナ}所成の最高の女神が世界を創造し、また彼女のみがそれを護持し、時がくれば彼女のみが収束する。」という文章が注目される。何故なら、世界創造のような大業は普通シヴァの専權に属するものとされているにもかかわらず、その大權が右の箇所ではシヴァーに帰せられてゐるからである。ここでは、シヴァとシヴァーの同一視が殆ど完全な程度に達しており、両者の區別は不可能に近い。これを前述の両者の

〈不即不離〉という観点から見れば、〈不離〉の方が前面に出ていることになる。

では、シヴァとシヴァーが合体した両性具有神は、唯一者として存在しているのであろうか。それとも、シヴァーと合体したシヴァと、シヴァと合体したシヴァーとの、二体の神として存在しているのであろうか。この問題については、『シヴァ・プラーナ』の中に明確な所論が見られないから、はつきりとは答えにくい。ただ敢て言えば、この場合、右のような二者択一的な扱え方は妥当でないように思われる。

先ず、シヴァとパールヴァティーは、殆どすべての場合、夫とその配偶神として、即ち二神として出てくる。つまり、夫のシヴァは男神、妻のパールヴァティーは女神として振舞う。従って、この情景の中に立って眺める限り、たとえシヴァとシヴァーが実は互いに半身を分け合う両性具有であるとしても、両者を別個の存在と見るのが常識と云うものである。とは言え、このように、男神、女神、両性神など一応は区別してみても、所詮それ等は全一なる根源的存在としてのシヴァから発出し転現したものに外ならない。⁽⁸⁾従って、シヴァーも結局はそのようなシヴァを離れて独立に存在し得るものではなく、自分の存在根拠を手操って行けば最後にはシヴァに帰一してしまう。だから、両性具有のシヴァとシヴァーも、両者に通底する〈本源的シヴァ〉に視点を据える時、そこでは完全に融合して一つになっている筈である。それ故、両者は我々の視点に依じて一体ともなれば二体ともなるのである。

(二)、前記の第三項で見たように、男神シヴァと両性神シヴァとの間には〈不即不離〉の関係があるのであった。同じことが当然シヴァー

についても言えるわけであるから、彼女もまた女神であつて且つ両性神なのであり、女神シヴァーと両性神シヴァーの間にも〈不即不離〉の関係がある筈である。すると、シヴァとシヴァーは五重の〈不即不離〉で結ばれていることになる。即ち、①男神シヴァと両性神シヴァの〈不即不離〉、②両性神シヴァに於けるシヴァとシヴァーの〈不即不離〉、③両性神シヴァと両性神シヴァーの〈不即不離〉、④両性神シヴァーに於けるシヴァとシヴァーの〈不即不離〉、⑤両性神シヴァーと女神シヴァーの〈不即不離〉、の五重である。これら五つの関係の中、シヴァとシヴァーが最も密接に重なり合うのは明らかに③の場面に於いてである。前記の小項(一)で見たヘシヴァとシヴァーの殆ど完全な同一化は、この局面に於て成り立つていたのである。他方、超越的絶対者としての〈男神シヴァ〉と、世界の根源としての〈女神シヴァー〉の間には、五重の〈不即不離〉が恰も薄紗を重ねたように介在することになった。こうして、第二項で述べたシヴァとシヴァーとの間隔が遙かに拡大されたのである。

以上を通じて、シヴァとシヴァーの間の〈不即〉と〈不離〉、逆に言えば〈即〉と〈離〉の、この矛盾する関係が、ともに一段と鮮明になっていることがわかる。即ち、両者の〈不即不離〉は益々複雑で精妙になっているのである。

なお一言すれば、このような両者の関係は、単に通時的・歴史的な関係であるのみならず、共時的・構造的な関係でもある、と理解しなければならぬであろう。

(二)、第三は精神分析学的に見た意味である。よく知られているように、C・G・ユングは、男性の無意識の中に女性的なものが潜んでい

ることを指摘して、これをアニマ(anima)と名付けた。同様に女性の無意識の中にも男性的なものが存在するとして、これを(animus)と呼んだ⁽⁹⁶⁾。勿論、アニマとアニムスの本質や機能などについては様々の議論があるであろう。しかし、この両概念は両性の無意識の中にある異性的なものを表すのに真に都合がよく、依用されることも多い⁽⁹⁷⁾。そこで今、この二概念を用いた両性の無意識の構図に沿って言えば、アニマをもつ男性とアニムスをもつ女性の、この両者の投影として、男女それぞれに両性具有像があつてよい筈である。けれども、第二節で見たヘルマプロディトスやポイマンドレース、それに『饗宴』のアンドロギュノスの場合、これらの両性具有像には、これと並存して対となるべき対応像を見出し難い⁽⁹⁸⁾。ところが『シヴァ・プラーナ』の場合には、シヴァとシヴァーの一对の男神と女神が共に両性具有とされており、右に述べたユング的構図によく適合する例を提供している。さて、最後に一言付け加えると、インド神話に於ける〈性〉の問題に詳しいオフラハティは、両性神は第一義的に男性である、と繰り返し述べている⁽⁹⁹⁾。このことから、本書に現れる〈女性の両性具有像〉(—奇妙な表現ではあるが—)の意義が察せられるであろう。

むすび

ここで改めて『シヴァ・プラーナ』に見られる〈両性具有像〉の特色を列記し、本稿の「むすび」としたい。

一、本書の〈両性具有像〉は、ヘルマプロディトス型とポイマンドレース型の双方の要素を合せもち、複雑多様な意味を荷っている。そ

の意味としては、(1)男女間の愛の究極の姿、(2)万宇の産出を一元的に説明する原理、(3)超越的絶対者と事実世界の〈不即不离〉を表示する象徴、(4)分裂したものの統合として憧憬された根源的全一者、等を指摘することができる。

二、本書にあつては、〈両性具有〉を構成する基本的要素の〈男〉と〈女〉が、正当な夫婦の関係にある男神と女神とである。

三、その男神シヴァと女神シヴァーが、それぞれに両性具有とされている。この事實は、(1)それによつて超越的絶対者と此の世界の〈不即不离〉の関係が一段と精緻な構造を持つに至っていること、(2)人間の無意識を巡るアニマ・アニムスの理解に正しく適合する好例となること、等の点で重要な意味をもっている。

四、この〈両性具有像〉の中に、概念内容を厳密に規定し概念間に明確な線を引くことに馴染まない、インド的思維の特性を読み取ることができる。

以上のことから『シヴァ・プラーナ』の〈両性具有像〉は、シヴァ・シヴァー型とも呼ぶべき極めて独特なものである、と言えるであろう。

註

- (1) 小口偉一郎監修『宗教学辞典』東京大学出版会、一九七三年、七五三—七五五頁。「両性具有」の項の執筆者は植島啓司氏である。
- (2) シヴァの妃はヒマラヤ山の娘パールヴァティー(Parvati)である。彼女はまた、ウマー(Uma)、ガウリー(Gaury)、シヴァの女性形シヴァー(Siva)、そして女性の産出・創造力を意味するシャクティ(Shakti)等の言葉でも呼ばれる。な

お、パールヴァティーの前身はサティー (Sati) で、結局この両者も同一の存在である。註の参照。他方、シヴァは、ハラ (Hara) / シャンカラ (Sankara) / シャンブ (Sambhu) 等の別名で呼ばれることが多い。

- (3) 『シヴァ・プラーナ』には活字本と手稿本を合わせて数種のテキストが存在し、その間の相違の程度・様相はさまざまである。しかし、今はテキスト自体の問題には触れない。ただ、本稿が基いた梵文テキストと英訳は、章節の区切りや詩句の番号等が殆ど完全に一致している。cf. L. Rocher, *The Purāṇas* (A History of Indian Literature, ed. J. Gonda, Vol. II, Fasc. 3), Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1986, pp. 222-228; R.C. Hazra, "The Problems Relating to the Śiva-Purāṇa", *Our Heritage* 1, 1953, pp. 46-48.

(4) テキストには *ghṛāṇasya* とあるが、*ghṛāṇasya* と読む。

(5) テキストには *ārḍhanārīśvaro* とあるが *ārḍhanārīśvaro* と読む。

(6) *ārḍha-nārī-nārākyam śiva-rūpam* (III.3.1).

(7) *ārḍha-nārī-naro bhūtvā* (III.3.8).

(8) *śiva-rūpam mahōttamam ārḍha-nārī-narārdham* (III.3.30).

(9) シヴァの全一性については、特に本書七・二・四の全章にわたって詳論されている。ちなみに、この第七集は前・後の二篇に分かれており、七・二・四と書かれたのは第七集後篇・第四章の意味である。

(10) テキストには *ārḍha-nārī-maka* とあるが、*ārḍha-nārī-maya* と読む。

(11) *Saśāśiva* (VI.4.8), *Śiva* (VI.4.33).

(12) 先キシムを五面とする箇所を挙げる。I.10.9, I.20.52, II.1.6.26, II.1.8.29, II.1.9.2, II.1.13.48, II.1.15.35, II.1.16.50, II.2.17.4, II.3.27.25, II.3.43.59, II.3.49.29, II.5.26.19, II.5.58.31, III.7.2, III.27.47, III.41.34, IV.4.52, VI.7.48-63, VI.12.16, VII.2.13.29, VII.2.29.22-27, VII.2.31.20, VII.2.32.18.

(13) ヲウツガ、以下の箇所では梵天が五面とされる。I.8.4, I.8.7, III.8.39, III.11.40, VII.2.13.26.

(14) この外にも、両者の等置関係を示す所は多い。試みに挙げれば、II.2.41.14, II.5.11.14, VI.1.17, VI.1.45, VI.3.7-8, VI.8.29, VI.11.47, VI.11.55, VI.13.61, VI.14.46, VII.2.35.43.

(15) 英訳書一六九五頁(第四巻) 参照。

(16) 英訳書は、テキストの *dayavyudha-dhara* を *daśavyudha-dhara* と読んだよう

で、「十の武器を携え、……」(……*beats ten weapons*) と訳している。あるいは依拠したテキストが違っていたのかも知れない。

- (17) この例は極めて多く枚挙の暇がない。その中の幾つかを示そう。II.3.3.26 (*jaḡatam ambā*), II.3.4.9 (*jaḡad-ambā*), II.3.5.22 (*jaḡat-prasū*), II.3.5.34 (*jaḡad-ambikā*), II.3.6.17 (*jaḡad-ambā*), II.3.6.19 (*jaḡad-ambā*), II.3.6.21 (*traiḷokya-mātrī*), II.3.6.37 (*jaḡad-ambikā*), II.3.6.39 (*jaḡad-ambā*), II.3.6.45 (*tri-loka-janam*), II.3.25.18 (*jaḡan-mātrī*), II.3.25.55 (*jaḡad-ambikā*), etc.
- (18) この三者の等置関係を示す文語を挙げる。II.4.17.9, II.4.17.33, II.5.26.16-18, II.5.53.46-52, V.45.3, V.45.47-49, V.45.62, V.45.67, V.48.27, V.49.39, V.51.3-5, etc.

(19) 勿論、この関係には更に *māyā* が加わるが、今はこれ以上立ち入らない。

(20) テキストには *jannānirupakāḥ* とあるのは *jannānirupakāḥ* の誤植である。英訳書でも見ているが、*“Śiva exemplifies birth in so much as He has the form of both Yoni (vaginal passage) and Linga (Penis).”*

(21) この外にも、曖昧ではあるが、両性具有を示唆する表現が幾つか出ている。それらには、両性具有の観念があまり明瞭でないから、本文に資料として載せることは控えるが、参考のため、ここに挙げる。

「左の部分にシャクティが入り組んでいるもの」(*vamāṅga-sannivistādrī-tanaya*, III.15.45) / 「左の部分がウマに飾られたもの」(*umā-bhūṣita-vamāṅga*, V.44.93) / 「左の部分が白らのシャクティであるブロン・ン・ニーに飾られたもの」(*sva-śaktyā vāma-bhage manomanyā vibhūṣitā*, VI.12.19) 等。

これらの言葉は何れもシヴァを指している。とすると、右の例や資料四およびに於て、シヴァーはシヴァの左側にあるとされているが、次の例でも、その両性具有の観念は殆ど見られないものの、やはりシヴァーをシヴァの左に配している。

「シヴァは左の腿にシャクティを乗せて……」(一・一七・三九)
「左側にシヴァーの像を置き、右側に私(シヴァ)の像を造って、夜に、意をこなく礼拝供養せよ。」(四・三九・一〇)
「かくの如く、私(シヴァ)の左の部分に、汝マノー・ン・ニーを念じて……」(六・七・六四)
「また神々はシヴァの左側にシャクティを見た。」(七・二・八・二二)

「彼（シヴァ）の左の部分に大自在女神を思念せよ。」（七・二・二三・一〇）しかし、六・一〇・二二・二三のように、シヴァーをシヴァの右側に置く例もある。念のため、次に原文を引いておこう。

tatas ca parayā bhaktiā tasya daksina-gām śivām,
jñāna-prasāda-kalikām samacroya hi jagat-prasūm.

(18) この句は『マヌ法典』一・三二に出づる「梵天が男性と女性の二通りになつた」という話を下敷にしたものである。次に、比較のため両者の原文を示す。

dividhā kṛtvātmāno deham strī caiva puruṣo' bhavat.

(Siva-purāṇa)

dividhā kṛtvātmāno deham ardhena puruṣo' bhavat,

ardhena nari tasyam sa virājam asrijat.

(Manu-smṛiti)

ところで、右の『マヌ法典』では梵天をヴィラージュの創造者としているが、『シヴァ・プラーナ』は、本文に資料として挙げた部分の直後（五・二九・二五）で「ヴィシュヌがヴィラージュを創造した」と述べている。ここに突如としてヴィシュヌが出てくることは全く不可解である。然も本書七・一・一七・二では梵天をヴィラージュの創造者としているのであるから、その錯綜なりが一層目立つ。その外にも、この第五集・第十九章は叙述の混乱がひどく、論旨の透徹を欠いている。

(19) 七・二・四・四八によれば、プルシヤなるマヌはシャンプフ即ちシヴァであり、シャタルーパーは「シヴァが愛する女性」（śiva-priyā）即ちシヴァーである。そうであれば、両性具有の梵天とは、所詮、両性具有のシヴァの身代り人形ではないだろうか。

なお、二・一・一六・一四―一五によれば、マヌとシャタルーパーが儲けたのは、二男二女ではなく、二男三女である。

(20) Plato, *Symposium* (The Loeb Classical Library 166), Cambridge: Harvard University Press/London: William Heinemann Ltd., 1983 (1st ed. 1925), pp. 132-147.

(21) Ovid, *Metamorphoses* (The Loeb Classical Library 42), I, Cambridge: Harvard University Press/London: William Heinemann Ltd., 1984 (1st ed. 1916), pp. 198-205.

(22) 児島喜久雄「ヘルムアフロディトス」（『古代彫刻の膺』岩波書店、昭和三十一年、所収）、一八六頁。

(23) A.D. Nock, A.-J. Festugière, *Corpus Hermeticum I, Hermès Trismégiste I* (Collection de Universités de France), Paris: Société d'Édition «Le Belle Lettres», 1983 (1^{re} éd. 1946), pp. 7-9

(24) A.D. Nock, A.-J. Festugière, *Corpus Hermeticum II, Hermès Trismégiste II* (Collection des Universités de France), Paris: Société d'Édition «Le Belle Lettres», 1983 (1^{re} éd. 1946), p. 321

(25) 荒井献・柴田有『ヘルメス文書』朝日出版社、一九八〇年、五三頁、註一五。また、ロコスが男性的であることは、同書五七頁、註三六も参照。

(26) エリアーデは「マントロキチノス」を「divine androgyny」や「human androgyny」の二つに分けて論じている。この分類は、上述した本稿の二型に相当するものに見えるかも知れない。しかし、エリアーデの場合と本稿とは比較分類の視点にズレがあり、従って両者は必ずしも同じものなる。M. Eliade, *Patterns in Comparative Religion* (Translated by R. Sheed), New York: The New American Library, 1974 (1st ed. 1963), pp. 420-425.

(27) 「両者の愛に匹敵するやうな愛は、過去・現在・未来にわたって存在しない。」と云ふ（二・三・八・二二）²⁰。cf. II.3.10.7, III.33.58-59.

また、本書の至るところで「シヴァとパールヴァティーの愛の戯れが描写される」とある。cf. II.1.16.49, II.2.21.12-47, II.2.22.65-70, II.4.1.10 ff., II.5.51.36-62, III.21.2-13, etc.

さらに「シヴァはパールヴァティーとともに言及されることが非常に多く、両者が何時も共同の存在であることを強く印象づける」²¹。cf. II.1.19.9-32, II.5.35.9, II.5.40.35, II.5.42.13-14, II.5.42.40, III.6.26, III.6.40, III.6.42, III.7.2, III.7.9, III.7.25, III.7.60, III.15.45-46, III.34.31, IV.13.56-58, IV.22.37, V.3.12-42, VII.1.34.34, VII.1.34.37, VII.1.35.10, VII.2.1.21, VII.2.10.7-9, VII.2.24.32, VII.2.24.65, VII.2.25.3, VII.2.27.69, VII.2.27.74, VII.2.30.3, VII.2.31.42-46, VII.2.33.8, VII.2.34.12-14, VII.2.37.54-55, etc.

ところで「パールヴァティーの前身はサティであるが、サティもまたシヴァの妻であった。このサティは「父タクシヤが夫のシヴァを祭儀に招待しなかったので、父に抗議して焼身自殺を遂げる。シヴァは彼女との別離に耐えかね、彼女の骨を身に帯びて彷徨した（二・三・四・三七）」²²。本書第二集の第三「パール

ヴァティ」章は、そのサティーがヒマラヤの娘パールヴァティとして転生し、再びシヴァの妻となるまでの愛と貞節の物語である。

なお「シヴァのリングを支えることができる者はパールヴァティのほかに存在しない」(四・二二・四六)と云う表現も面白い。

(61) 上野照夫『インド美術論考』平凡社、昭和四八年、二二五、二三四—六頁。

(62) P. K. Agrawala, *Mithuna. The Male-Female Symbol in Indian Art and Literature*, New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd, 1983, pp. 26-27.

(63) たとえば、七・一・一五—二二—三では、シヴァを形容するのに「考えられなく」(aparatarya)「量ることなく」(ameya)「特性がなく」(mrguna)「有とか無とか一切の規定を離れて」(sarva-sad-asad-vyakti-varjita)「一切の譬喩を離れて」(sarvopama-nimukta)等の言葉が羅列されている。また、シヴァが語を意 (manas) の対象となることにより、幾度も述べられている。cf. II.3.49.28, III.9.50, IV.35.41, VII.2.35.59.

(64) 資料一三および註(5)参照。

(65) 本書一・五・五三—四一で、シヴァは「不変・不滅・永遠」(nirvikārya avayano nityah)とされている。ほかにも「シヴァが不変・不滅とされる例は夥しく存在する。その主なものを挙げる。

avyaya (II.1.4.33, II.2.42.49, II.5.49.1, III.16.37, III.18.13, IV.41.6, V.3.65, VII.2.31.8), avikāra (II.3.49.16, II.3.51.40), nirvikāra (II.3.49.13, II.3.49.21, II.3.50.42, II.5.11.16, II.5.25.7, II.5.25.30, II.5.26.6, II.5.32.27, IV.22.2), nirvikārin (II.1.9.27, II.2.3.34, II.2.23.5, II.5.30.37, IV.41.5), nirvikāra (IV.21.16).

(66) このように、シヴァは能造者 (kartṛ) であって、世界創造等の実現者とされている。即ち、世界と関係をもつかの如くである。これは、もしシヴァが世界の創造等に関係がないとすると、シヴァは全く実質のない無力の存在となってしまうので、彼に積極的な威力や特性を帰属せしめた結果である。そして、然もなおシヴァの超越性を護るために、創造等の実際活動はシヴァが梵天「ヴァシシュヌ」、乃至の三神になつて遂行する、とされるのである。cf. II.2.3.32-33, II.2.6.19, II.2.10.37, II.3.38.38-39, II.5.6.13, II.5.13.31-32, II.5.53.40, VII.13.13-15, VII.1.23.20, VII.1.23.27, etc.

このシヴァの超越面を更に徹底させて、シヴァを「非行為者」(akartṛ) とか

「行為なきもの」(iskṛiya) とする場合もある。たとえば、四・三五・一二二や七・一・六・六九等。

また、後述するように、二・二・一四・三〇—三三に於ては、梵天等の三神に創造等の大業を命じた者はシヴァであるといわれており、シヴァーはさうして「三神を産めるもの」(tri-deva-janani) と呼ばれる。

(67) このようにシヴァーにシヴァと同じ高い地位を与えて讃美している例は、二・二・三三—三六—三七にも見出される。勿論、シヴァ自身を世界の創造・護持・収束とする叙述も少なくない。cf. II.2.10.35, II.2.41.4, II.3.28.22, II.3.44.75, II.4.12.34, II.4.15.23, III.16.36, V.44.100, etc. など、前註参照。

(68) この点については、資料一、八および二二参照。また、二・一・六・一九では「シヴァはシヴァ自身の体から自ら出して創造された」と述べている。

(69) C. G. Jung, *Psychologie und Religion* (Studienausgabe bei Walter. Erschienen 1963 in *Zur Psychologie westlicher und östlicher Religion*, Gesamte Werke, Band II), Olten: Walter-Verlag, 1984, S.40-42; ditto, *Ation: Researches into the phenomenology of the Self* (The Collected Works, vol. 9, pt. 2), London: Routledge & Kegan Paul, 1968 (1st ed. 1959), chap. III.

(70) J. Singer, *Androgyny: Towards a New Theory of Sexuality*, New York: Anchor Press/Doubleday, 1976, chap. 18. 前掲『宗教学辞典』七五四頁「雄雌龍」(ヘンロギトス)について「(ヘン)ミーン・ヘン」著「川村邦光」『ヘンロギトスの神話』平凡社、一九八八年に収載)四九—五二頁。この雄雌龍の間然する二つが、ない美事なエッセの単行本初出は、『夢の宇宙誌』コスモグラフィック・ファンタスティック(美術出版社、一九六四年)に於てであるという。

(71) 両性具有者の場合、対応する相手を考えるのは変かも知れない。しかし、Poinandres は男性名詞である。Androgynus と Hermaphroditos も、そのミチン語形である Androgynus は Hermaphroditus と見限り男性名詞であることは確かであつて、それが面白かつたのである。

(72) Wendy Doniger O'Flaherty, *Women, Androgynes, and Other Mythical Beasts*, Chicago and London: The University of Chicago Press, 1980, pp. 28, 32, 89, 317-318.

付記 本稿は、昭和六十三年五月に大正大学で行われた第三十一回東北印度学宗教学会学術大会に於て、その要旨のみ口頭で述べたものである。